アニマル・セラピーによる高齢者への
精神的・身体的影響

明治学院大学社会学部社会福祉学科

2022 年度　卒業論文

指導教授　金圓景准教授

19sw1111　神野みこと

目次

序章・・1

第１章　アニマル・セラピーの誕生と歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第１節　アニマル・セラピーとは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２節　アニマル・セラピーの歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
１．世界の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(1)　世界的なアニマル・セラピーの流れ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(2)　アニマル・セラピーの発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
２．日本の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３節　人と動物の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第２章　アニマル・セラピーの活動分類や活動形態など・・・・・・・・・・・・・・・7
第１節　AAT と AAA・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第２節　アニマル・セラピーの活動の形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第３節　アニマル・セラピーに期待される効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第３章　アニマル・セラピーによる高齢者と施設職員への影響とペット・ロス・・・13
第１節　在宅で暮らす高齢者にペットが与える影響・・・・・・・・・・・・・・・・13
第２節　アニマル・セラピーを実施する施設で暮らす高齢者への影響・・・・・・14
第３節　アニマル・セラピーを実施する職員への影響・・・・・・・・・・・・・・・15
第４節　アニマル・セラピーとペット・ロス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第４章　アニマル・セラピーと動物のストレスや代替活動について・・・・・・・・18
第１節　アニマル・セラピーと動物のストレス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第２節　ロボット・セラピー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第５章　アニマル・セラピー実施に関するアンケート調査
　　―高齢者介護施設・事業所を中心に―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第１節　アンケート調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
１．調査目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
２．対象者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
３．倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
４．調査内容及び期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
５．分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

第２節　アンケート調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
１．アンケート調査全体の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
２．認知症グループホームと特別養護老人ホームの施設別の結果・・・・・・27
第３節　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
１．アンケート結果による高齢者への影響と施設職員への影響・・・・・・・30
２．認知症グループホームと特別養護老人ホームの比較・・・・・・・・・・31
第４節　本調査の限界と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

終章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

別紙・アンケート調査用紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

序章

本論文は、アニマル・セラピーが高齢者に及ぼす影響について注目し、施設で暮らす高齢者の身体的・精神的影響及び施設職員への影響について調べるだけでなく、アニマル・セラピーの効果と今後の在り方について検討することを目的とする。

近年、ペットは家族という考え方が一般的になってきており、ペットという存在から伴侶動物という存在に変化している。その背景には、核家族化・独居生活・隣人との関係性の希薄化だけでなく、コロナ禍において在宅ワークが増え、外出頻度が減少するなど、自宅で過ごす時間が長くなってくる中で動物を飼う人が増えていることが挙げられる。このような状況のなか、ペットサロンやペット同伴の宿・お店などが注目され普及している。また、動物カフェでは譲渡を目的とした猫カフェだけでなく、ハリネズミやフクロウなどのエキゾチックアニマルとふれあえるカフェが増加している。

このように動物とふれあう機会やペットに対する認識の変化から、今後日本においてアニマル・セラピーがもたらす効果にも期待が高まっている。ペットフード協会（2022）によると、猫の飼育頭数がコロナ禍以前と比べて増加傾向にあり、単身の 60-70 代女性の飼育率が伸びている。高齢者が動物とふれあうことによって得られる効果を理解し活用していくことで、高齢化の進む日本において精神的・身体的健康を向上・維持していくことが見込まれ、QOL の向上にもつながると推察できる。ペット飼育者は医療機関の受診回数が少ない傾向にあることから、動物の存在が人の健康の維持につながっていることが考えられる（星ら 2020）。

そして、アメリカで始まった「エデン・オルタナティブ」の 10 の原則では、高齢者が生き生きと暮らすために継続的な関係を築く必要があるものとして、動物が含まれている。しかしながら、日本では高齢者が施設で暮らすようになると動物とふれあう機会が限られてしまうことが多い。このような環境は、動物が好きな高齢者にとって良い環境であるとは言い難い。そのため、高齢者施設におけるアニマル・セラピー実施について今後の在り方も含めて検討する必要がある。そこで、本研究では高齢者施設で暮らす高齢者にとって、アニマル・セラピーが精神的・身体的に影響するのか先行研究から理解するとともに、施設で暮らす高齢者へのアニマル・セラピーの効果について、アンケート調査から検討する。全体の構成は次の通りである。

第 1 章ではアニマル・セラピーとはなにか、歴史について、第 2 章ではアニマル・セラピーの活動分類や活動形態とその効果について取り上げる。第 3 章ではアニマル・セラピー

による高齢者と施設職員への影響、ペット・ロスについて、第４章ではアニマル・セラピーと動物のストレスやロボット・セラピーの効果がアニマル・セラピーの代替活動になることについて取り上げる。第５章ではアニマル・セラピー実施に関するアンケート調査から、高齢者への影響と施設職員への影響について調査結果から考察する。

第１章　アニマル・セラピーの誕生と歴史

第１節　アニマル・セラピーとは

アニマル・セラピーとは、「人と動物が関わることによる、心理的、社会的、身体的な効果を期待する行為」である（岩本 2001）。すなわち、動物と関わることで人の健康状態に良い影響を及ぼすことを目的とした活動のことと言える。

しかし、欧米やイギリスなどのアニマル・セラピーが普及している国では、アニマル・セラピーという名称は使用されていない。世界で一般的に用いられている名称は、Animal Assisted Therapy「動物介在療法」（以下「AAT」という）と Animal Assisted Activity「動物介在活動」（以下「AAA」という）である。これは、岩本（2001）によると、世界的な情報発信拠点であるデルタ協会（現在は Pet Partners 協会になっている）の指針で、治療と評価が目的の場合は AAT、治療目的でないものは AAA の名称を使用することが推奨されているからである。

また、Animal Assisted Education「動物介在教育」（以下「AAE」という）という、動物とのふれあいを通して社会性・協調性などを育てていくことを目的とした活動も注目されており、AAT・AAA・AAE の３つに分類されると述べている（川添 2009）。

さらに、公益社団法人日本動物病院協会（以下「JAHA」という）のホームページにおいても、３つに分類し紹介している。これらのことから、日本におけるアニマル・セラピーは、AAT と AAA に AAE を加えた３つの活動を、広義の意味としてのアニマル・セラピーと呼んでいるのではないかと考える。

一方で、日本ではアニマル・セラピーという名称が一般に広く知られている。その背景として、関連する名称が統一されていなかったこと、日本のメディアでアニマル・セラピーという名称を用いて紹介されていたことがあげられる。実際に、国内のテレビや新聞などのメディアでは、アニマル・セラピーという名称が多く用いられている。筆者も、初めてアニマ

ル・セラピーを知ったのはテレビの情報番組であった。また、関連出版物等もアニマル・セラピーの名称が用いられているものが多い。

岩本（2001）は、名称が統一されていなかった背景には、様々な団体や個人がそれぞれに動物を治療活動に参加させて実践していたためと考えられると指摘している。そのため、アニマル・セラピー、ペット・セラピー、アニマル・アシステッド・セラピー、アニマル・ファシリテッド・セラピー、ヒューマン・コンパニオン・アニマル・セラピーなど、様々な名称が存在し、時代とともに変遷してきた。

本研究では、これらのことを踏まえて、「アニマル・セラピー」という名称を用いる。

第２節　アニマル・セラピーの歴史

1.　世界の歴史

（1）世界的なアニマル・セラピーの流れ

まず初めに、アニマル・セラピーの記録が残されている資料、アニマル・セラピーが広く普及している国の最初の取り組み（文献が残っているもの）について、山田（2001）を参考に年代順に紹介する。

アニマル・セラピーの最古の文献資料は、紀元前 400 年前のギリシャでの乗馬による治療と言われている。その文献によって、戦争で負傷した兵士に乗馬をさせて治療をする方法が存在していたことがわかっている。この乗馬療法は、1875 年に麻痺を伴う神経障害の治療に有効であることが報告され、世界各国で身体的なリハビリを中心として、機能している（横山 1996)。

一方で、施設におけるアニマル・セラピーの治療方法として記録に残されている最も古い試みは、18 世紀のイギリス・ヨーク市にあるヨーク・リトリートでの試みとされている。ヨーク・リトリートとは、精神障害者の療養施設である。1972 年にフレンド会と呼ばれるキリスト友会の一員で、紅茶商のウィリアム・テューク（チュークとも言われる）が設立した。従来、精神疾患・精神障害のある人への治療方法は、罰を課すことによって行われていたが、この施設では正の強化によって行動のコントロールを行うことを方針として設立された背景がある。（正の強化とは、ある行動に対して報酬を与えることでその行動を促進すること。オペラント条件づけであり、行動療法で用いられている。〈長谷川・廣中 2008〉）その正の強化の一助として、ウサギやニワトリなどの動物の世話をする方法が行われてい

た（山田 2001）。

ドイツのビーレフェルトでは、1897 年にベーテルというてんかん症状のある人のための滞在型治療施設が設立され、アニマル・セラピーの試みが行われていた。現在は、高齢者・障害者・児童・ホームレスの人々など、多岐に渡るサービス提供を行っている（v. Bodelschwingh Foundation Bethel 2022）。

アメリカでは、1942 年にニューヨーク州のポーリングにある陸軍航空隊療養センターにおいて組織的な活動が始められ、動物を治療の補助として用いることで、安らぎを得ていたとされている（Morrison 2007）。横山（1996）によると、戦争で負傷したり情緒的外傷を抱えたりした退役軍人の回復期の場所として設立された病院であり、家畜・馬のいる作業農場や動物と触れ合う広大な公園があったといわれている。

このように、治療方法の確立・治療効果が認められる以前に、多様な国で各々のやり方でアニマル・セラピーが行われていたことがわかる。

（2）アニマル・セラピーの発展

現代におけるアニマル・セラピーが発展するきっかけとなったのは、1953 年に臨床学者のレビンソン（Levinson,B.M.）が、自身の愛犬ジングルスと内向的であった患者の子どもとの偶然の関わりを観察し、1962 年に発表した論文「The dog as a "co-therapist."」である（レビンソン 2002）。この論文の発表後、ペット・セラピーという用語を用いて研究・論文の発表を行い、今日のアニマル・セラピーの発展に寄与した人物である。

これを皮切りに、動物が人の治療の場において効果をもたらすことを科学的に証明する動きが活発化し、人間と動物の関係について研究が進められた。研究者の一人であるバスタッド（Bustad,L.K.）は、人間と動物の精神的な結びつきについてヒューマン・アニマル・ボンド（人と動物の絆）という新たな名称を残したり、アメリカにあるデルタ協会（現在は Pet Partners）、フランスの AFIRAC、イギリスの SCAS、オーストリアの IEMT など、人間と動物に関する研究の援助を目的とした組織が続々と設立されたりと、アニマル・セラピーが注目された（横山 1996）。1992 年には、デルタ協会・AFIRAC・SCAS が中心となり、IAHAIO が NGO 法人として正式に設立した。人間と動物の相互作用について促進することが目的であり、現在は世界 90 を超える学会や協会が加盟している（IAHAIO のホームページより，2022 年 12 月 1 日閲覧）。

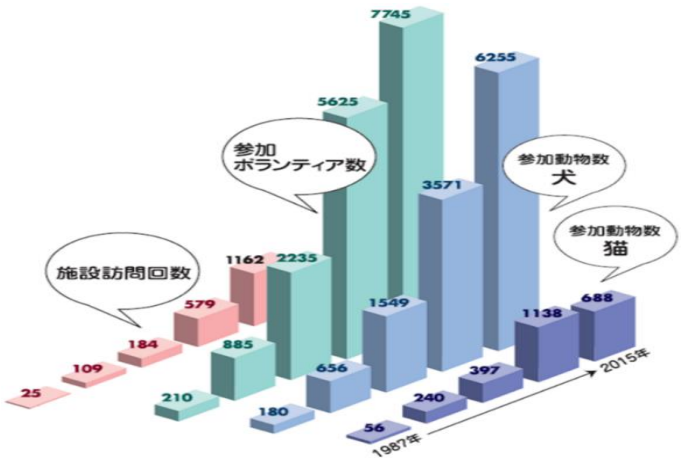
2. 日本の歴史

日本では、1920 年頃に完成した精神療法である森田療法の 1 つとして動物の飼育が組み込まれていた。横山（1996）によると、森田正馬が創案したこの療法の中の作業期において、共同作業や食事の準備・片付けといった生活全般の当番などと同時に動物の飼育が行われていた。現在も、東京慈恵会医科大学森田療法センターでの治療の一環として用いられている。

日本にアニマル・セラピーが普及するようになったきっかけとして、1986 年に JAHA が始めた、人と動物のふれあい活動（以下「CAPP 活動」という）がある。この活動は、ヒューマン・アニマル・ボンドの理念のもとに始まった。岩本（2001）によると、JAHA が高齢者や障害者の施設などでのボランティア活動を積極的に行ったことによって、アニマル・セラピーの活動が全国的に普及したと述べている。この活動は、高齢者施設、病院、学校などの施設に訪問し、動物とふれあうボランティア活動である。JAHA の会員病院と、活動に賛同し活動の基準をクリアした動物の飼い主によるボランティアによって行われている。

JAHA の現在の訪問活動先は 164 か所あり、（北海道・東北・北陸地方：１８か所、関東：62 か所、中部・近畿・中国地方：49 か所、四国・九州地方：35 か所の施設）全国的に活動を行っている（2016 年現在）。この活動を始めた 1986 年から 2020 年までの累計の活動実績は、訪問回数：22,571 回、参加獣医師：29,775 人、参加ボランティア：168,059 人、参加動物：犬…126,828 頭、猫…24,205 頭、その他の動物（ウサギ・モルモット・ハムスター・小鳥など）…7,776 頭となっている（図１）。

図 1CAPP 活動実績



（出典）公益社団法人日本動物病院協会（2020）「広がるふれあい活動の輪」
（https://www.jaha.or.jp/hab/capp/activity/）2022.12.01 閲覧.

第 3 節　人と動物の歴史

アニマル・セラピーが人に良い効果をもたらすことができるのは何故なのか、人と動物の歴史から考える。人が動物と生活を共にする・家畜化するようになったのは、何万年も前からと言われている。一番古くに家畜化された犬においては、様々な研究がなされ議論されているが、大森ら（2009）によると 20,000 年~15,000 年前頃に家畜化された可能性が高いという。家畜化の起源は様々な論が存在するが、狼（のちの犬）が人の居住区に入ってきた際に食べ物を与えたことが起源と考えられている説が有力である。他にも、猟で囮として利用するため、信仰のため、ペットとして利用するための心理的欲求などがある（レビンソン 2002）。

どのような起源であった場合でも、人と動物が今日まで生活を共にできているのは、社会性動物との共生が可能であったからと言える。あるいは互いの利害の一致とも言えるのではないかと考える。レビンソン，B.M.（2002：2）は、「多くの高等動物はある種の社会的技能を身につけており、相手が敵でない限り友好的に行動する」と述べている。そして、集団を形成する社会性動物がペットとなっていたとも述べている。また、横山（1996）も社会的動物同士の出会いとして人と犬の関係に触れ、社会性があることによって犬にとっては人が群れのリーダー・親的存在となり、人にとっては犬が部下・子ども的存在となる感覚があったと述べている。そこには、より安定した生活を営むため、生き残っていくためといった互いの利害の一致があったのではないかと推測できる。

その後、人は家畜化した動物を食べたり生活をより快適にしたりするために利用してきた側面が大きいと考えられる。犬は狩猟や番犬として、馬は荷物や人を運ぶ移動手段として、羊は毛皮の利用としてなど、道具的要素が強かった。

しかし、現代に至るまでにその様相は変化している。ペットは家族という捉え方、ペット（愛玩動物）からコンパニオン・アニマル（伴侶動物）というより密接で対等な関係を表す名称が生まれた。コンパニオン・アニマルとは、正しい躾とマナー、獣医学的なケアを受けていることが条件であり、犬・猫・ウサギが代表的な存在である（福井 2021）。
横山（1996）は、動物が人の生活に深く入り込んだ結果、人間と動物の間に種族を超えた感情が芽生えたと論じ、その感情を「友情」や「愛情」と形容している。そしてこのことは、科学の進展により番犬・ネズミ捕りの猫といった存在があまり必要とされなくなった時代から、現代に至るまで生活を共にしていることが証拠であるとしている。

これらの背景から考えて、アニマル・セラピーが人に良い効果をもたらすことができるの

は、「友情」・「愛情」といった精神的な繋がりが長い年月をかけて築かれたことによって、人が好意的な感情を向ける存在となったことが考えられる。そして、動物との関係が深い人・動物が好きな人にとっては良い効果を表すようになったと捉えられる。

しかし、Human-Animal Interaction（HAI）「人と動物の相互関係」の分野において、「動物との関わりによって得られる利益は何故生まれるのか」を適切に証明することができなかったとレビンソン（2002）は述べている。一方で、適切な証明は難しいものの哺乳類における個体同士のふれあいに関する研究で、人と動物の絆が形成される過程には、一般に「愛情ホルモン」、「幸せホルモン」と呼ばれるオキシトシンやアルギニン-バソプレシンといったホルモンが役割を果たしている可能性が示唆された（レビンソン 2002）。この研究から、人や一定の動物が我が子を育てる感覚が、他の動物にも適応されていると捉えられる。

そして、長い年月継承されてきた精神的な繋がりや我が子を育てる感覚が、好意的な感情となり人に良い効果をもたらしていると考える。

第 2 章　アニマル・セラピーの活動分類や活動形態など

アニマル・セラピーの活動は、目的や対象者、活動内容によって分類されている（越智 2017）。第 1 章第 1 節では、アニマル・セラピーの活動の種類は AAT、AAA、AAE の 3 つであると述べた。しかし、IAHAIO（2018）では更に細分化し定義している。前述した 3 つの活動に加えて、 Animal Assisted Interventions（以下「AAI」という）「動物介在介入」、Animal Assisted Coaching/Counseling（AAC）「動物介在指導（コーチング）／カウンセリング活動」があり、AAI はこれら 4 つの活動の傘となる概念である。これらのことを踏まえて第 2 章では、高齢者の精神的・身体的影響について考察するため、AAT と AAA の活動に焦点を当てる。

第 1 節　AAT と AAA

まず、IAHAIO（2018）の定義において、AAT と AAA に共通して明文化されているのは、「関係している動物の行動、必要事項、健康、ストレスの兆候について適切な知識を持っていなければならない。」ということである。

一方で、AAT と AAA の異なる点は、これも第 1 章第 1 節において説明しているが、治療行為としての活動か否かという点である。IAHAIO（2018）の定義に沿って詳しく説明すると、医療・教育・心理学者や社会福祉士などの専門家の監督の元で、目標と計画・結果の測定が行われる治療が目的の介入を AAT としている。この目的により AAT は、身体的、認知的、行動学的または社会心理的な機能の向上に焦点を当てている治療行為となる。さらに、正式に訓練を受けた（有効な資格、学位等）専門家が監督し、その専門家が専門的技術を駆使して実行されるものとしている。また、動物によって名称が異なるドッグセラピーやイルカ療法、乗馬療法などがあるが、これらは AAT の治療方法の 1 つである。

AAA は、AAT などと比べてより緩やかな相互作用（ふれあい）や訪問活動であり、教育やレクリエーションを目的として行っている。被災者やトラウマのある人への癒し、高齢者施設等でのふれあいによる癒しに焦点が当てられている。AAT のように治療が目的ではないため、目標の評価は原則行わない。人と動物がペア又はチームとなり活動に参加するうえで、基礎的な教育・活動準備・活動適性の評価を受けている必要がある。

IAHAIO の定義と JAHA が行う CAPP 活動における AAT と AAA の活動内容から AAT と AAA の対象者・目的・内容について表に記した（表 1）。

表 1　AAT と AAA の違い

	対象者	目的	内容
AAT	治療を目的として受ける人	治療：精神的身体的機能、社会的機能の向上	医療従事者の監督下で治療の補助を行う
AAA	高齢者施設の入居者、被災者・トラウマのある人など	情緒的安定・QOL の向上・レクリエーション	ふれあい

（出典）IAHAIO（2018）「IAHAIO WHITE PAPER- THE IAHAIO DEFINITIONS FOR ANIMAL ASSISTED INTERVENTION AND GUIDELINES FOR WELLNESS OF ANIMALS-」を参考に、筆者作成

このように、AAT と AAA には違いがあるが、どのような人を対象とするのか、活動において組まれているプログラムなどによっては、大差のない内容・効果となることも考えられる。山﨑（2014）も、活動の内容・ふれあい方が AAT と AAA とで類似している場合があ

ることに触れている。

このことから、AAA や AAT の定義はアニマル・セラピーを実施する側の定義であり、アニマル・セラピーを受ける人にとっての定義ではないことがわかる。

第 2 節　アニマル・セラピーの活動形態

アニマル・セラピーによる動物とのかかわり方の分類として、大まかに分けると飼育型、訪問型、施設利用型の 3 つに分けられる。横山（1996：25）は、アニマル・セラピーについて施設型として①「施設訪問型」、②「施設飼育型」、在宅型として③「在宅訪問型」、④「在宅飼育型」に区別している。その他、⑤「野外活動型」、⑥「他の治療の補助」に分類している。

①「施設訪問型」は、高齢者福祉施設、障害者福祉施設、病院（主に精神の領域)、ホスピスなどの施設にボランティアの人と動物が訪問し行う活動である。JAHA の CAPP 活動やアニマル・セラピーの活動を行うその他の団体の活動実績等から、日本で最も多いアニマル・セラピーの形態であると言える。

②「施設飼育型」は、高齢者福祉施設（入所施設)、障害者施設（入所施設)、病院（主に精神の領域)、刑務所などの施設に住み入居者の人々と生活を共にする形態である。

③「在宅訪問型」は、ボランティアなどが動物を連れて対象者の自宅に訪れる活動である。例えば、動物は好きだが身体的理由や経済的理由などによって飼育が難しい状況にある高齢者、独居高齢者、自宅から出ることが難しい人などの状態にある人に向けた方法である。

④「在宅飼育型」は、自宅で動物を飼育することである。身体障害者のサポートをする盲導犬や介助犬などの使役犬、家庭で飼育されている一般的なペットという状態が在宅飼育型に当てはまる。また、家族の一員として・愛情や友情といった精神的な繋がりから、方法や捉え方によってはペットも治療と呼べる場合がある。

事例として、イギリス北部では室温などに無関心な高齢者が体調を崩したり、冬場に凍死してしまったりする事例が多々あった。そこで、独居高齢者の家にセキセイインコを配ったところ、室温の調整をこまめに行うようになったという。また、精神的・身体的な健康度の検査の結果、植物の育成と比較してセキセイインコの方が統計的に優位であったことがわかっている（横山 1996)。このことから、人と動物の絆あるいは友情や愛情といった精神的繋がりから、動物によって人の生活・健康が良い方向に働くことがあると言える。

⑤「野外活動型」は、治療者やボランティアと共にアニマル・セラピーを受ける人が外に出向くことで行われる活動である。イルカや馬などの自宅で飼育することが難しい動物が野外活動型に当てはまる。しかし、日本治療的乗馬協会では、施設訪問型の移動乗馬教室、施設飼育型の特別支援学校での取り組みがあり（日本治療的乗馬協会のホームページより、2022 年 12 月 1 日閲覧)、一概に野外活動型に分類されるわけではないが、横山（1996）の分類方法と乗馬療法の性質を考慮して野外活動型に分類した。

⑥「他の治療の補助」としては、心理療法での補助として動物が介入する形態がある。他の活動形態との違いは、心理療法を受ける人の目的や目標に対して、間接的に補助をするという点である。動物との関わりによって目的や目標が達成されるのではなく、他の治療目的・目標の過程で精神的な補助をするために動物が介入する。横山（1996：35）は、「―治療関係や治療過程を促進するために補助的に動物を面接場面に介入するというやり方が多い…」と述べている。

この 6 つの活動形態のうち、①「施設訪問型」と②「施設飼育型」のプラス面とマイナス面について、横山（1996）が示している内容を表にした（表２）。活動形態のプラス面とマイナス面を理解し、アニマル・セラピーを取り入れる必要があり、それぞれの特性を考慮して組み合わせたり計画したりすることが求められる。

表２　活動形態のプラス面とマイナス面

	プラス面	マイナス面
①　施設訪問型	・多くの人がふれあえる ・活動標的を定めやすい ・飼育の労力の不要	・施設職員を含め、受ける側とその家族等周囲の人の理解が必要（②も同様） ・短時間の効果 ・感染症・アレルギーの懸念（②も同様）
②　施設飼育型	・毎日会える ・役割分担で飼育できる	・①同様 ・動物が嫌いな人への配慮 ・動物への執着によるトラブル ・職員の業務負担 ・動物の肥満の懸念

（出典）横山（1996：25-29）『アニマル・セラピーとは何か』を元に筆者作成

第３節　アニマル・セラピーに期待される効果

アニマル・セラピーによって得られる効果として、横山（1996）は「生理的効果」、「心理的効果」、「社会的効果」の３つを挙げている。「生理的効果」は動物とのふれあいによる血圧の低下、「心理的効果」は不安感の緩和・気力の向上・動物への愛着、「社会的効果」は他者との交流の増加といった効果があることがアメリカやドイツなどでの研究で明らかにされている（横山 1996）。また、この３つの効果が合わさってクライエントに良い影響を及ぼすと横山（1996）は考え、生理的・心理的・身体的効果のそれぞれの利点について、表にまとめた（表３）。これらの効果によって、人の生活・健康に良い影響を及ぼすと考えられる。

表３　アニマル・セラピーによる人への利点

生理的利点	
1	病気の回復・適応、病気との闘い
2	リラックス、血圧やコレステロール値の低下
3	神経筋肉組織のリハビリ（特に乗馬療法）
心理的利点	
1	元気づけ、同期の増加、活動性（多忙）・感覚刺激
2	リラックス、くつろぎ作用
3	自尊心・有用感・優越感・責任などの肯定的感情、心理的自立を促す
4	達成感（特に乗馬療法）
5	ユーモア、遊びを提供する
6	親密な感情、無条件の受容、他者に受け入れられている感じの促進
7	感情表出（言語的・非言語的）、カタルシス作用
8	教育的効果（子どもに対して）
9	注意持続時間の延長、反応までの時間の短縮
10	回想作用
11	自分の境遇と重ね合わせる
社会的利点	
1	社会的相互作用、人間関係を結ぶ「触媒効果・社会的潤滑油」
2	言語活性化作用（スタッフや仲間との）
3	集団のまとまり、協力関係
4	身体的・経済的な独立を促進する（盲導犬・聴導犬など）
5	スタッフへの協力を促す

（出典）横山（1996：53）『アニマル・セラピーとは何か』を元に筆者作成

横山（1996）は、「変化」と「安定性」が３つの利点から浮かび上がってくると述べてい

る。「変化」は、動物がいることによって外出や歩くといった活動の機会が増えたり、生活サイクル・環境などが動物に合わせたものになったりすることで得られる変化である。例えば、外出することによって交流が増える、散歩によって運動の機会が確保され健康に繋がる、第 2 章第 2 節で紹介したセキセイインコの飼育による生活環境の改善などが挙げられる。

「安定性」については、変化による刺激が一時的なものであったり強かったりといった不安定なものではなく、穏やかな安定性があると横山（1996）は述べている。つまり、感情の起伏が極端なものではなく、穏やかで安定した状態のことを指していると考える。

また、横山（1996）は責任感や自立心なども必要となるため、アニマル・セラピーは生活に「静と動」つまりは変化を作り出すと述べている。表 3 の効果を見ると、人への良い効果があらわれるのは心理的な作用が大きいと考えられる。横山（1996）も述べているように動物の存在によって散歩や生活習慣など活動の変化もあるが、動物に対して好意的な感心や感情を抱いている場合、動物と関わることによって癒される感覚・リラックスなどにつながり、それが第 1 章第 3 節で触れたオキシトシンやアルギニン-バソプレシンといったホルモンなどに影響すると考えられる。そして、心理的効果によって、穏やかな気持ち等になることで他者との関わりが増えたり（社会的利点）、血圧の低下が見られたり（生理的利点）するのである。

臨床場面での高齢者の健康について期待される効果は、身体的効果・心理効果・社会性効果の 3 つに分けられる（山田 2001）（表 4 ）。山田（2001）が臨床場面にいると分類している人は、身体的・精神的な症状のために通院や入院をしている人、滞在型治療施設や高齢者施設等に滞在・通っている人、刑務所にいる人である。

表 4　高齢者に期待される効果

対象者	身体効果	心理効果	社会性効果
高齢者	活動（歩行）,緊張低下（血圧）	抑うつ，孤独感，感情喚起，自己効力感，社会的サポート	発話，会話，アイコンタクト，スタッフへの協力

（出典）山田（2001：23）『アニマル・セラピーとは何か』一部抜粋し筆者作成

これらの期待される効果は、ペットを飼育している高齢者を対象とした国内外（主に欧米）の論文で多く研究・報告されている。例えば身体効果では、ペットが犬の場合の活動量の多

さ、活動量が多いことによる歩行速度や健康につながることを研究した論文、ペット飼育者と非飼育者のリハビリテーションへの取り組みの差、血圧の低下などがあり、ペットの存在によって良い効果があることが示唆されている（星 2020)。

心理効果では、ストレスへの耐性、不安の解消、高齢者施設での AAA による抑うつの程度の低下が報告されている（星 2020)。社会性効果では、ペットの存在が話題になって会話が生まれる（星 2020)、高齢者施設での CAPP 活動では、施設職員やボランティアとのコミュニケーションにおいて笑顔やうなずきなどの非言語的コミュニケーションの増加が報告されている（水谷ら 2008)。

これらのことを踏まえると、動物に対して関心や好意のある高齢者には、山田（2001）が示す期待される効果が表れると言える。第 3 章では、アニマル・セラピーによる高齢者への影響についてこれらの効果を基盤として、日本で行われた研究論文から環境別の影響について捉える。

第 3 章　アニマル・セラピーによる高齢者と施設職員への影響とペット・ロス

第 1 節　在宅で暮らす高齢者にペットが与える影響

ペットを広義の意味でのアニマル・セラピーと捉えた時、その存在が自宅で暮らす高齢者への影響として、第 2 章第 3 節で述べたような効果が報告されている。安藤（2008）が行った、首都圏の 60~74 歳の男女を対象としたペットとの情緒的交流による精神的健康についての調査においても、情緒的一体感が強いほど抑うつ状態や孤独感が弱いことが報告されている。

ペット飼育の有無による高齢者の健康を調査した論文では、ペットの存在（特に犬）によって高齢者の IADL・社会性の維持やうつ傾向の予防に影響していることが示唆されている（三島ら 2019)。社会性の面では、特にペットの存在が交友関係に関連していることが推察されている（三島ら 2019)。一方で、金児（2006）の調査ではペットがいることで他者との会話の機会は増えるものの関係性が深まることは稀であること、調査対象者の半数が旅行・買い物などの活動に制約が出ていること、飼育者に対する非飼育者の印象から、社会性については必ずしも良い影響を与えているとは言えないと推察している。この違いについて三島ら（2018）は、調査対象者が壮年期にあたる人であったか・老年期にあたる人であ

ったかという年齢が関係していると考察している。この年齢による違いから、仕事や旅行など外に出る活動の量・機会が現役世代と高齢者とで異なり、外出頻度の少ない傾向にある高齢者にとっては、ペットの存在が健康や社会性に良い影響を及ぼすと考えられる。

ペットの存在が 13 年後の要介護度予防効果に影響するのかを調査した論文では、犬・猫の世話をするほど主観的健康感が維持され、外出頻度が高まる傾向が統計学的に有意に関連すると示唆されている（星 2018）。そして、要介護度を抑制する直接的な要因として主観的健康感と外出頻度が挙げられ、間接的な要因として年間収入額が挙げられていた（星 2018）。この結果から、星（2018）は年間収入によって犬・猫を飼育できる状況の人が、犬・猫の世話によって主観的健康感を高めることで外出頻度が増加し、13 年後の要介護度に影響する因果構造を提唱している。

しかし、星旦二が考察した因果構造とは関係性が認められない結果も多くあったことから、必ずしも要介護度に影響が見られるとは言えないが、ペットが犬の場合では散歩による運動の機会が増えることで身体的効果に起因する要介護状態への予防に繋がることが考えられる。また、セキセイインコの例（第 2 章第 2 節）のように環境改善や環境を保つことによって生活リズムや環境が整えられ、要介護状態を予防することができている可能性も推察できる。

第 2 節　アニマル・セラピーを実施する施設で暮らす高齢者への影響

アニマル・セラピーを実施している施設を調査した論文では、施設訪問型のボランティアによる活動から高齢者への影響を調査している論文が殆どであった。戸山ら（2009）が行った 2 つの特別養護老人ホームでの AAA と音楽療法（以下「MT」という）との効果比較では、有意な差は認められなかったものの、AAA の方が MT よりも活動量が多い傾向にあることが示唆されている。また、自律神経系活動を測った調査では MT と比べ AAA の方が高齢者の心身を高揚させる効果があったことから、動物の可愛らしい仕草に加えてボランティア・飼い主とのコミュニケーションの機会が増えることが要因として考察されている（戸山 2009）。

特別養護老人ホームの認知症高齢者の唾液アミラーゼによるストレス測定では、９名中緊張の高い２名を除く 7 名にストレス軽減効果が認められている（上田ら 2018）。また、徳本ら（2001）の調査では、動物の仕草やふれあいによって精神面の安定を図ることができる、犬とふれあう空間を工夫することで利用者間のコミュニケーションが活発になる、自主

的に餌あげをしてもらうことでリハビリテーションに繋がるといった様子が確認されている。このことから、アニマル・セラピーによる身体・心理・社会性効果があることが示唆される。

自宅でペットを飼う高齢者と比較すると、特別養護老人ホームなどの施設で暮らす高齢者は要介護状態であることや外出の機会が少ないことから、動物とのふれあいが良い刺激になっていると言える。自宅でペットとして飼育している高齢者に対しては、刺激よりも維持や安定という要素が強いと考えられる。

第３節　アニマル・セラピーを実施する職員への影響

上田ら（2018）の調査では、アニマル・セラピー実施時の職員への影響について、業務として認知症高齢者のサポートをする必要性を理由として、大きなストレス軽減効果は認められなかったとしている。しかし、21 名中 10 名はストレス軽減効果が認められたことから、関わり方によっては効果があると推察されている（上田ら 2018)。

なお、アニマル・セラピーを実施する施設職員への一般的な影響や効果を中心に検討した研究は見当たらなかった。また、施設職員への影響について触れている研究・調査についてもあまり見受けられなかった。

第４節　アニマル・セラピーと「ペット・ロス」

在宅飼育型（所謂ペット）と施設飼育型は動物との情緒的な結びつきが深まりやすく、動物の存在が当たり前となっているからこそ、「ペット・ロス」による影響が大きいと考えられる。動物と暮らす上で死は避けられないものであること、筆者が閲読したアニマル・セラピーに関する書籍のすべてに「ペット・ロス」の項目があったことから、「ペット・ロス」について触れる。

「ペット・ロス」はペットの喪失のことである。木村（2008）によると、「ペット・ロス」という用語は 2000 年前後から知られるようになった用語である。日本医師会(2005)では、「ペット・ロス」と「ペット・ロス症候群」とで区別している。「ペット・ロス」は直訳してペットを失うことであり、「ペット・ロス症候群」はペットを失ったことによる精神的・身体的な不調のことを指すとしている。内田（2001）は日本医師会の定義のもと、「ペット・ロス症候群」について悲嘆の変容過程が重度であり医師や臨床心理士などの専門家による治療を必要とする患者にたいしてのみ使用されるとしている。一方で、横山（1996）のよう

にかかわりの深いペットを喪失した場合の悲しみや抑うつに加えて、躁的になる・何も感じないといった逃避や防衛等の喪失したことに起因する精神的・身体的な影響も「ペット・ロス」に含むとしている場合もある。

そして、「ペット・ロス症候群」という表現は日本独自のものであり、諸外国ではペット・ロスに伴う悲嘆・悲哀・死別反応といった表現が使用されている（木村 2008)。「ペット・ロス症候群」という用語は、「ペットが死んだために心に障害をきたしている人たち」のことを指すようなイメージがもたれてしまい、ペットを飼う多くの人が経験すると考えられる精神的・身体的な状態を責めるような場面もある（川添 2009)。そのため、「ペット・ロス症候群」ではなく、横山（1996）や川添（2009）が使用している精神的・身体的な影響も含めた「ペット・ロス」を用いる。

人がペットに対して深い愛情や友情を向け、ペットとの繋がりが強いほど別れ（主に死別）による精神的な影響は大きくなる。主にペットに対して強い愛着がある人、パートナー・子どもといった家族の一員として認識している場合に精神的な影響があり、生活環境にまで影響が及ぶことも考えられる。アイペット損害保険株式会社（2016）の調査によると、ペットとの別れで最も多いのは老衰であり、別れを経験した人の約 4 割が精神的・身体的面において不調を感じている。また、老衰を除く別れを経験した人では約 6 割が不調を感じている。内田（2001：201）は、「多くの飼い主は一時的な悲しみ、つまり悲哀を感じ、徐々にその感情は薄れていく。」と述べている。つまり、時間が解決してくれるものであるということである。日本医師会（2005）は、ペットの死からの段階的な立ち直りの例として、主な経過を示している（表 5)。

表 5　ペットの死から段階的な立ち直りの例

ステップ 1	ショックのあまり事実を認められない →ペットの死を現実のものとして受け入れる
ステップ 2	絶望感と悲しみの日々→自分の気持ちを素直に表現する
ステップ 3	少しずつ回復していく→ペットがいない環境に慣れていく
ステップ 4	もとの生活に戻る→失ったペットのことを思い出として整理する

（出典）日本医師会（2005）「『別離』への心の予行演習－ペットロス症候群－」（https://www.med.or.jp/dl-med/people/plaza/201.pdf）2022.12.22 閲覧,

しかし、時にその悲哀や悲嘆が長く続いてしまうことや深い悲しみから抜け出せなくな

ってしまうことなどによって、日常生活や精神・身体面での健康を脅かしてしまうこともある。そのような状況に陥ってしまう可能性を少しでも減らすために、「死の教育」が必要であると横山（1996）は述べている。「死の教育」は、子どもの頃からペット・動物とふれあったり生活をしたりする機会を設け、殆どのペット・動物が自分よりも短い命であることを知るということである（横山 1996）。そうすることで、子どもの頃から動物とのふれあいの中で動物には死があることを身に着け、生きている時は友情や愛情を思い切り注ぎ、死を迎えた時は悲哀の過程を辿り、新たな動物に目を向けるということを体得できると横山（1996）は述べている。動物が好きであっても生活状況や環境など様々な要因から飼うことが難しいことも考えられる。また、「死の教育」で得た動物（ペット）との向き合い方・付き合い方によって「ペット・ロス」を乗り越えられる場合もあるが、乗り越えられない場合もあることに加えて、現在大人と呼ばれる年齢の人々にとっては実践が困難である。これらのことを踏まえて、「ペット・ロス」に対する援助の方法も必要である。

援助方法として、友人や家族などから話を聞いてくれる人・受容的な態度の人が話を聞くことが挙げられる（川添 2009）。川添（2009）によると、受容的に話を聞いてくれる人は「ペット・ロス」の状態にある本人が予め見つけておく必要があるとしている。そうすることで、自分にとって話しやすい人にスムーズに頼ることができるからであると考えられる。その他に、「ペット・ロス」による悲哀状態の深刻化を予防する方法として、ペット仲間のネットワーク、メモリアル・アルバムや葬式などを行うことが挙げられる（川添 2009）。これらの方法は、心の整理や死の受容を円滑にし、悲哀の過程を進めることができると考えられる。また、近年ではペットの毛を羊毛フェルトに利用し、ペットの姿形を再現したぬいぐるみなどもあり、ペットに思いを馳せる手段が増えている。そして、ペットを亡くした人々の自助グループによるミーティングやホットラインも設けられており、ペットが生きている間にペットの死について考える機会やペットの死後に語り合う場として機能している（Pet Lovers meeting のホームページより、2023 年 1 月 5 日閲覧）（ペットロス支え愛の会のホームページより、2023 年 1 月 5 日閲覧）。これらの自助・互助だけでなく、専門家の医師や臨床心理士などによる心のケアも存在する。

しかし、内田（2001）によると、ペット・ロスによって多くの飼い主が経験することが考えられる悲哀・悲嘆の過程を、可能な範囲で短くそして軽く経過できるように、深い悲嘆の状態に陥ることを防ぎ、サポートする分野の取り組みが日本では遅れていると述べている。アメリカの大学付属の動物病院では、ペットの死に対する相談のための動物医療ソーシャ

ルワーカーが配置され、常駐しているところが多い（内田 2001）。また、開業獣医師も医師と直接話す時間やカウンセラーと契約し、カウンセラーを紹介できる体制を整えている（内田 2001）。日本においても動物医療ソーシャルワーカーのいる病院が存在するが、その数は少なく自助努力に委ねられている面が殆どであることが現状としてある（山川 2020）。これらのことを踏まえて、動物医療ソーシャルワーカーの普及はあまり進んでいないことが推察できるが、動物医療ソーシャルワーカーの存在がどれくらい必要とされるか、今後のサポートとして機能していくかに留意しながら、動物病院での普及や推進をしていく必要性がある。

最後に方法の１つとして、新たな動物（ペット）を迎えることも挙げられる。横山（1996）によると、新たな動物に生前の動物とのかかわりを重ねることで悲哀の過程を助けてくれる存在となる。動物の死を看取ることに対する悲しみが深く、また飼うことに対してつらい思いや恐怖を感じる、死を迎えた動物に対する罪悪感など、動物を飼うことに対して後ろ向きになってしまうことも考えられるが、新たな動物との関わりによって愛情や友情を伝えること・楽しみ、今までの楽しかったことを呼び起こす前向きな面も持ち合わせている。どのような時期・段階で新たな動物を迎え入れるのかによって、プラスに働くかマイナスに働くか影響が異なることも考えられるため、タイミングを考慮することが重要である。

第４章　アニマル・セラピーと動物のストレスや代替活動について

第１節　アニマル・セラピーと動物のストレス

アニマル・セラピーによる動物へのストレスでは、Google Scholar での検索結果から、尿中カテコールアミン濃度を測定し、動物のストレスを調査する方法が多く用いられていることがわかった。また、対象の動物は犬である論文のみ確認することができた。理由として、施設訪問型のアニマル・セラピーが、主に犬によって行われていることが挙げられる。

田中ら（2004）が行った施設訪問型のアニマル・セラピーによる動物へのストレス調査によると、犬がストレスを感じる要因は人とのふれあいではなく、施設という場所・空間によるものと推察している。高齢者施設での活動経験の少ない犬だけでなく、活動経験が多い犬でも新奇な環境での活動にはストレスを感じていることがわかっている（田中ら 2004）。また、活動経験の多い犬は同じ施設での活動回数を重ねるごとにストレス値が減少してい

る。このことから、高齢者施設などの新奇刺激の方が大きく影響していると考えられている（田中ら 2004)。そして、東京都と神奈川県の 3 つの特別養護老人ホームで調査した施設訪問型の活動に参加する犬のストレスを測った調査では、触れられる・行動を制御されるなどの場面においても犬へのストレスに大きな影響は認められなかった（田中ら 2005)。

植竹ら（2007）の調査では、特別養護老人ホームに訪問する犬のストレスについて、月に 1 回程度の参加であっても飼い主との参加であれば、環境・雰囲気に容易に順応することができているため、犬が特に緊張を感じていないことを示唆している。

堀井ら（2003）も、特別養護老人ホームでの月に 1~2 回の訪問型ボランティアにおける犬のストレスを調査しており、犬が予測不能な状態に直面することに起因して軽度のストレスがかかっていることを示唆している。そして、軽度なストレスは避けられないため、重度なストレスとならないように配慮すること・ストレス低減について考える必要があるとしている（堀井ら 2003)。

これらの調査結果から、犬が施設訪問型の活動に参加した際に、環境あるいは予測不能な事態が起こった場面でストレスを感じることがわかった。しかし、活動に参加できる条件を満たしている犬と飼い主によるボランティアであるため、そのストレス値は犬に重大な影響を及ぼす程のものではないと言える。そして、犬に過度なストレスがかかることがないよう、アニマル・セラピーに関わる人々の配慮や活動計画が必要であることが伺える。

第 2 節　ロボット・セラピー

ロボット・セラピーは高齢者福祉のコスト低減方法の 1 つであり、動物とふれあうことが困難な環境や人に対してもアニマル・セラピーと同様の効果が期待できる代替モデルにもなる。アニマル・セラピーと同様に Robot Assisted Therapy「ロボット介在療法」（以下「RAT」という）と Robot Assisted Activity「ロボット介在活動」（以下「RAA」という）の２つがある（木村 2012)。目的は AAT と AAA と大きな差異はなく、治療を目的としたものかレクリエーションとして楽しむものかという違いである。高齢者施設で行われるロボット・セラピーは、RAA が主である。

ロボット・セラピーで用いられるロボットは、セラピーロボットやコミュニケーションロボット、ペット型ロボット、メンタルコミットロボット®など様々な目的別の呼称がある。そして、人を癒す存在として様々なロボットが誕生している。その中でもアレルギーや感染

症・噛みつきによる事故の問題、世話・ペット不可の物件といった、動物を飼うことが困難な場所・人々に対するセラピーを目的として、研究開発されたアザラシ型ロボットのパロ®がある（産業技術総合研究所）。ぬいぐるみのような手触りのアザラシ型ロボットのパロ®は©産業技術総合研究所が開発し、©株式会社知能システムが製造したロボットである。研究背景には、高齢化によって見込まれる介護保険の逼迫を防ぐため、QOL の向上による介護予防や医療や施設などでの介護の質を高めることが望まれるなかで、動物を導入することが難しい医療・施設の現場でのロボット・セラピーを提案したことに始まる（産業技術総合研究所 2004）。そして、世界で最もセラピー効果のあるロボットとしてギネス世界記録にも認定されており（産業技術総合研究所 2004）、アメリカでは「非薬物療法」として保険適用されている（株式会社知能システム 2018）。また、介護ロボットとして「半額等の補助対象」にもなっている（株式会社知能システム 2019）。高齢者向けの施設での研究によって、ロボット・セラピーが生理的・心理的・社会的効果があることが示されている（産業技術総合研究所 2004）。

パロ®以外にも、©Sony Marketing Inc の aibo®や© GROOVE X, Inc の LOVOT®など、多くのロボットが存在し、家庭だけでなく医療・福祉の現場でも活用されている。高齢者施設で調査された論文では、塞ぎがちな高齢者の笑顔が引き出せることや気分の落ち着きといった効果があることが推察されている（米岡 2012）。介護老人保健施設の認知症高齢者を調査対象とした研究では、ロボットに積極的に関わる姿が見られたり、表情を真似たりなどの親和性が確認された（山岡ら 2010）。また、普段は無表情の高齢者の明るい表情やロボットに対して歌を歌うなどの変化も見られ、ロボットがいない時に話題として取り上げるなどの愛着も確認されている（山岡ら 2010）。木村（2012）によると、高齢者施設での認知症高齢者に対するロボット・セラピーの効果として、豊かな表情・会話・周囲への関心・積極性・集中力といった効果が認められている。これらの調査から、ロボット・セラピーはアニマル・セラピーの代替として機能できていることが伺える。

しかし、筆者が閲読した論文の多くで、ロボットに関心を示さない人や注意して見るものの関わらない人もいることが確認されている。このことから、ロボットの姿形による興味・関心の差やロボット自体に関心がないことも考えられるため、アニマル・セラピーと同様に個人差のある効果である。

アニマル・セラピーと比較した際のロボット・セラピーの利点は、①動物アレルギーがない、②動物を介しての感染症のリスクがない、③噛みつく・引っ掻くといった事故のリスク

がない、④世話が不要、⑤食費や医療費などの費用負担がない（ロボットにかかる費用と動物を飼育による総合的な費用負担を比べて）、⑥生物的な死がない、⑦ロボットを迎える際に環境に左右されない、⑧自宅で暮らす場合に行動制限がないなどがある（産業技術総合研究所 2004）（GROOVE X, Inc）。欠点としては、①関心がない人もいる、②故障する可能性、③行動パターンの限界などがある。また、動物に比べて温もりや愛着度が低いことが考えられたが、比較する文献や言及している文献が見当たらなかったため、憶測の域を出ないものとなった。

これらの利点と欠点から、アニマル・セラピーに比べてロボット・セラピーは導入しやすいと考えられる。ロボット・セラピーがアニマル・セラピーの代替として機能することが期待できるが、高齢者施設でどのようなセラピーを導入するにおいても一人一人の好みや関心は異なるため、環境や利用者の状況・傾向、職員への影響などを考慮して活動を実施することが必要となる。

第５章　アニマル・セラピー実施に関するアンケート調査
―高齢者介護施設・事業所を中心に―

第１節　アンケート調査概要

1. 調査目的

高齢者施設で暮らす高齢者へのアニマル・セラピーによる精神的・身体的な影響について日々高齢者と関わる職員の立場からの意見をもとに、アニマル・セラピーの有用性について調査することを目的とする。調査前に関連先行研究を検討した結果、国内の論文において施設飼育型の論文報告が施設訪問型と比べて鮮少であったため、本調査では施設飼育型による精神的・身体的な影響に焦点を当てる。また、アニマル・セラピーを実施することで高齢者だけでなく、関わっている職員にとってどのように作用しているのかについても調査する。

2. 対象者

Ａ県にあるＢ法人が運営する高齢者施設において、アニマル・セラピー（正式には CAPP 活動であるが、ここでは広義の意味としてアニマル・セラピーと呼称する）を行っている施

設の職員の方を対象とした。なお、本研究で対象とするアニマル・セラピーの形態は、施設飼育型（月に１度の施設訪問型の CAPP 活動も併せて行っている施設も含む）である。

調査対象者の選定については、調査協力先であったＢ法人に筆者が作成したアンケートのフォーマット、Google フォームでの回答に繋がる QR コードを添付した資料を送った。その後、Ｂ法人が運営する特別養護老人ホーム、認知症グループホームを中心に、小規模多機能型居宅介護、短期入所生活介護等の CAPP 活動を行っている施設・施設職員の方で協力いただける人に word で入力し回答する、または Google フォームのアンケート機能から匿名で回答をしてもらった。

3. 倫理的配慮

調査を実施する前に、事前に調査に向けた説明書を B 法人に送付し、担当職員に調査項目について目を通していただき、法人内で承認を受けて実施に至った。調査の際には、今回の調査によって得られた情報は、卒業論文執筆の目的以外に利用することはないこと、また個人が特定されないように努める旨をアンケートの末尾に記載した。

4. 調査内容及び期間

アニマル・セラピー（CAPP 活動）に関する調査と題して、アニマル・セラピーが利用者及び職員の方々に与える精神的・身体的影響やその実態について、一部水谷歩ら（2008）「高齢者福祉施設等で実施される【アニマル・セラピーについての効果】の検証事業」を参考に、作成した。調査項目は、①職員の基本属性（勤めている施設、現在勤めている施設の勤務年数、アニマル・セラピーに携わった年数、所持している資格、現在の職場での役割・役職）、②施設職員の方々から見た利用者の様子について（精神的作用・身体的作用）③施設職員の方々から見た CAPP 活動とその影響について（CAPP 活動に対する感じ方、職員への心理的効果、職員間のコミュニケーションに対する効果）④コロナ禍の CAPP 活動について（活動の制限・変化、利用者への影響、職員への影響）とした。回答は、word と Google フォームのアンケート機能を用いて行った。調査期間は、2022 年 10 月 27 日~11 月 18 日であった。

5. 分析方法

調査結果は、エクセル表を用いてすべて単純集計し、水谷歩ら（2008）「高齢者福祉施設

等で実施される【アニマル・セラピーについての効果】の検証事業」との一部比較に加えて、施設全体のアニマル・セラピーに対する影響・評価を中心に分析した。その他回答数が最も多かった特別養護老人ホームと認知症グループホームでの回答を中心に、比較分析を行った。

第 2 節　アンケート調査結果

アンケートの回答数は 32 件（回収率 100%）であった。回答者の勤務先の比率は、認知症グループホーム 13 件（41%）、特別養護老人ホーム 9 件（21%）、小規模多機能型居宅介護 5 件（16%）、短期入所生活介護 3 件（9%）、法人本部 2 件（2%）であった。有効回答 32 件を分析対象とした。

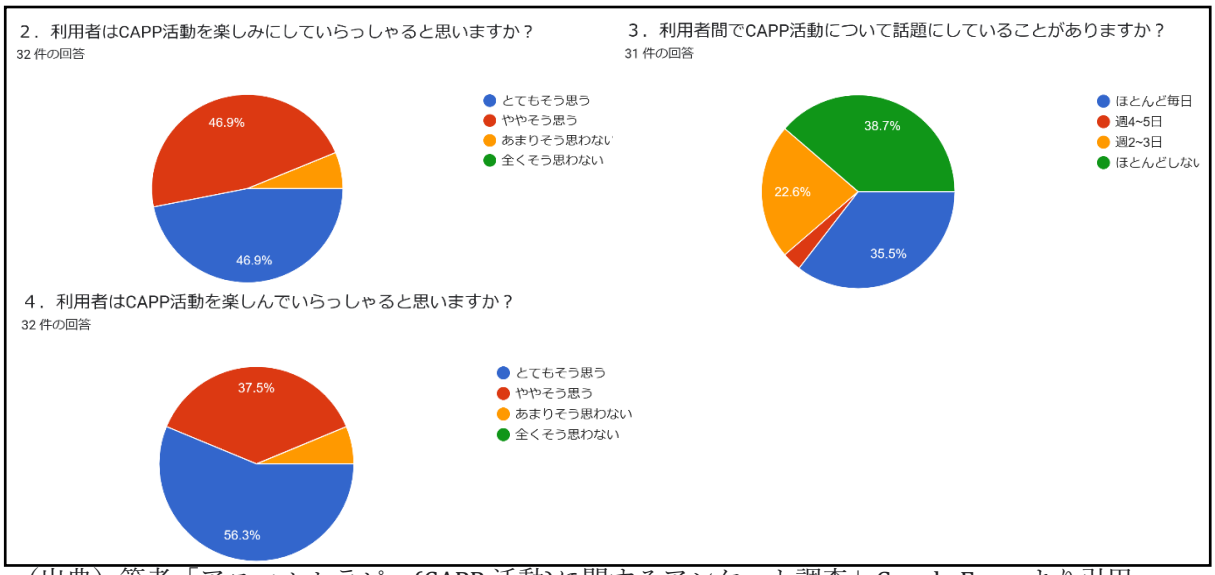
1. アンケート調査全体の結果

基本属性において、回答者の現在の職場に勤め始めた年数の幅は、2001 年頃~2021 年までであった。年数の幅は広くばらつきがあるが、2018 年が最も多かった。アニマル・セラピー（CAPP 活動）に携わった年数の幅では、0~18 年であり、4 年が最も多かった。所持している資格は介護福祉士が最も多く、次いで介護支援専門員が多かった。回答者の役職は介護職が最も多く、次いで管理者が多かった。

全体の回答の傾向として、「施設職員からみた利用者の様子について」、「施設職員から見た CAPP 活動とその影響について」では、どちらにおいても良い効果や影響が伺える回答が多かった。特に、CAPP 活動を楽しみにしているか・実際に楽しんでいるかの様子に関して、「楽しみにしている」・「楽しんでいる」と感じている回答者が 9 割に及んでいる。しかし、利用者が CAPP 活動を話題にする頻度では、相対的に話題にしている利用者が多いものの、4 つの選択肢の中で「ほとんどしない」が 38.7%と最も多かった（図 2）。

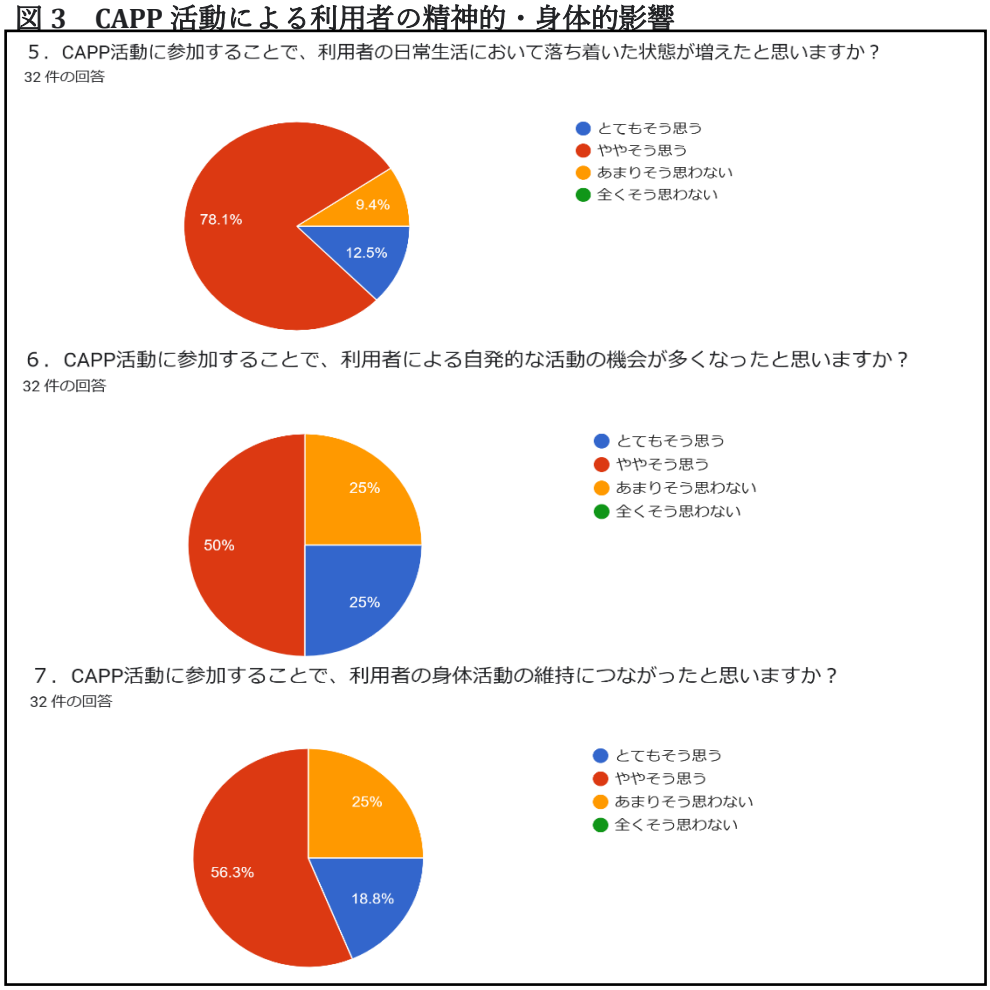
CAPP 活動によって落ち着いた状態・自発的な活動・身体活動の維持といった、精神的・身体的な影響においては、「あまり影響がない」と感じている回答もあったものの、落ち着いた状態では約 9 割、自発的な活動と身体活動の維持は 7 割弱の職員が「影響があった」と感じているという回答が得られた（図 3）。

図 2　CAPP 活動に関する利用者の様子



（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」Google Form より引用

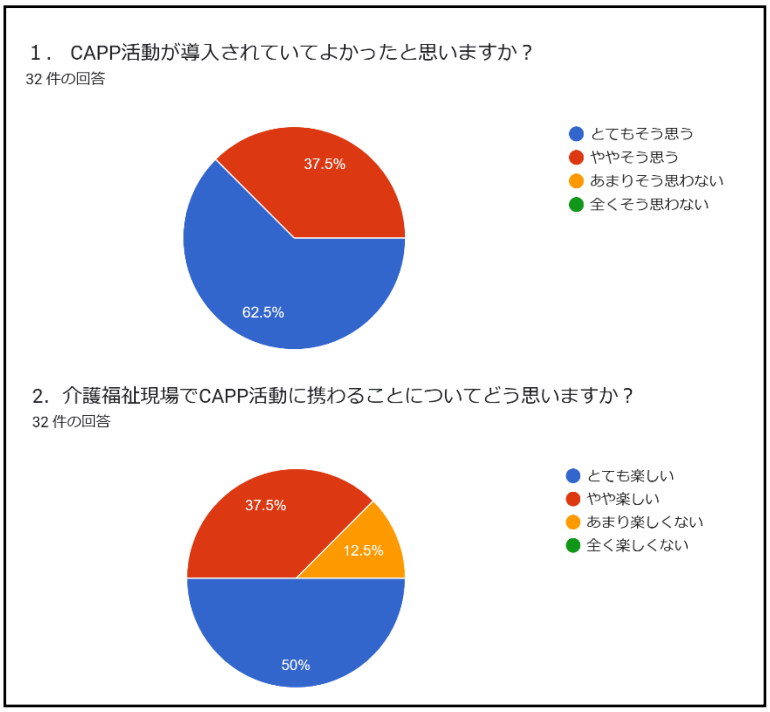
図 3　CAPP 活動による利用者の精神的・身体的影響



（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」Google Form より引用

「CAPP 活動が導入されていてよかったと思いますか？」という質問においては、「とてもそう思う」が 37.5%、「ややそう思う」が 62.5%であった。「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」を選択した回答者はいなかった（図 4）。しかし、アニマル・セラピーが導入されていてよかったと回答しているものの、CAPP 活動に携わることに対して、「あまり楽しくない」と回答した方が 4 名いた（図 4）。そのうち 3 名は、職員自身が「動物が苦手」であることを理由として挙げていた。残りの 1 名は、「関わり方、利用者が喜んでいたか不明」という点を挙げていた。また、28 名中 16 名が「とても楽しい」、12 名が「やや楽しい」と回答していた。「楽しい」とした理由では、「癒し・笑顔・動物が好き」といった理由が多い傾向にあった。そして、職員自身が動物と関わることによって「楽しい」と感じる面と、利用者が動物と関わっている様子・利用者と一緒に動物とふれあう行為から「楽しい」と感じる面の 2 つの側面について回答している人が多かった。一方で、「楽しい」と感じるものの、職員の業務負担と費用・老衰や病気等の別れがあることなどについて触れている方もいた。

図 4　職員の CAPP 活動に対する認識



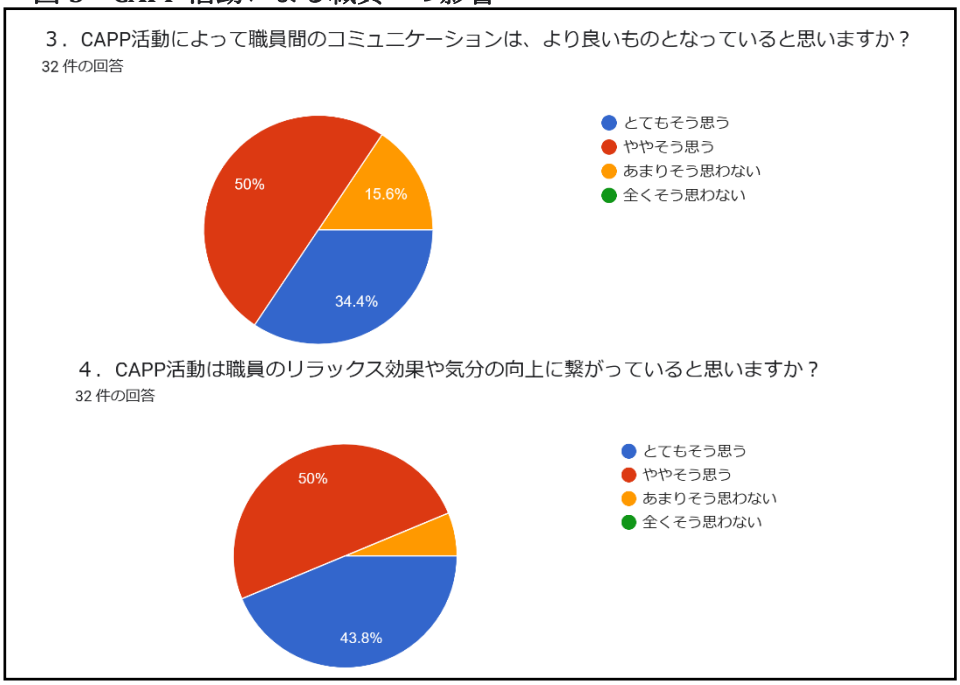
（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」Google Form より引用

CAPP 活動によって職員間のコミュニケーションがより良いものとなっているかの質問で

は、「とてもそう思う」が 11 名、「ややそう思う」が 16 名、「あまりそう思わない」が 5 名であり、コミュニケーションがより良いものとなっていると感じている人が多い傾向であった（図 5）。「より良いもの」になっている理由として、動物がいることによる話題や情報・現状の共有によって、コミュニケーションが増えたとするものが多く回答されていた。また、関わりの薄かった職員とも動物を通して関わりが増えた方や、雰囲気が和むことでコミュニケーションがより良いものとなったと感じている方などもいた。しかし、動物が好きな職員とそうでない職員との温度差や意見が割れる場合があること、施設犬の存在が当たり前であることからコミュニケーションの活発化は見られないこと、動物がいることがコミュニケーションツールとなっているとは異なっているとする意見も見られた。

CAPP 活動が職員のリラックス効果や気分の向上につながっているかの質問では、「とてもそう思う」が 14 名、「ややそう思う」が 16 名、「あまりそう思わない」が 2 名であった（図 5）。職員自身が癒されているという回答、職員全体の雰囲気からリラックス効果や癒されている人が多いと感じている回答、動物が苦手な人にとってリラックス効果等は感じないという回答、動物とふれあう利用者の様子から気分の向上につながっているという回答が得られた。

図 5　CAPP 活動による職員への影響



（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」Google Form より引用

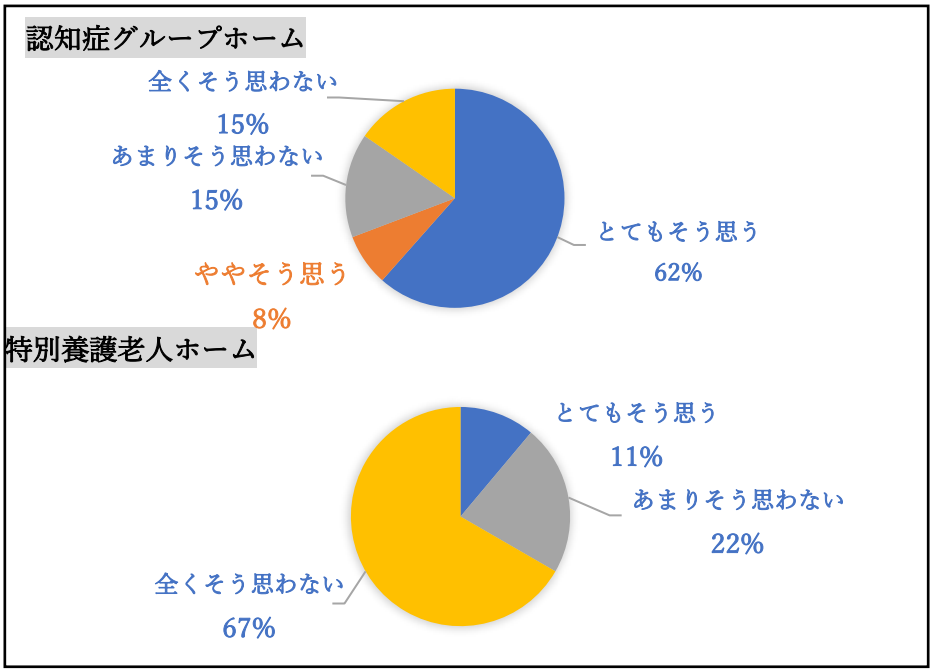
コロナ禍における活動制限・変化の質問では 32 件中 19 件が「(とても・やや) そう思う」と回答していた。その 19 件のうち 11 件が活動の制限・変化による利用者への影響があったとしている。職員への影響については、制限・変化があったと回答している 19 件のうち 16 件の回答があり、「(とても・やや) そう思う」が 8 件、「あまりそう思わない」が 8 件であった。

2. 認知症グループホームと特別養護老人ホームの施設別の結果

認知症グループホームと特別養護老人ホームの 2 つの施設を比較する理由として、どちらの施設も利用者の“家”としての場であることから、施設飼育型による利用者への影響について、それぞれの施設の違いによってどのような差が出るのか検討するためである。そのため、認知症グループホームと特別養護老人ホームの施設別の結果から、特に違いの見受けられた項目に絞って取り上げる。

利用者間での CAPP 活動の話題の有無について、認知症グループホームでは話題にしていることがあるについて「(とても・やや) そう思う」が 7 割を占めているのに対して、特別養護老人ホームでは「(あまり・全く) そう思わない」が約 9 割を占めている (図 6)。

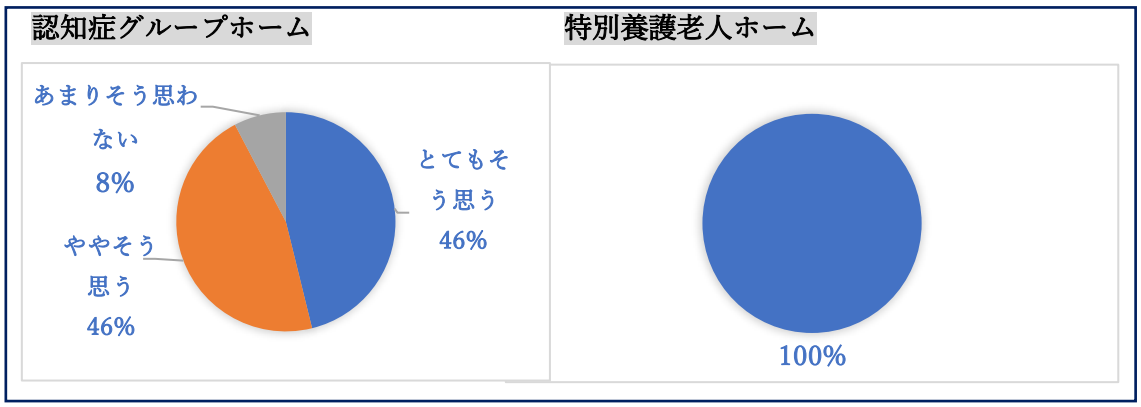
図 6　利用者間で CAPP 活動について話題にしていることがありますか？



(出典) 筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」より筆者作成

利用者が CAPP 活動を楽しんでいるかについては、認知症グループホームが「とてもそう思う」が 46%、「ややそう思う」が 46%だったのに対し、特別養護老人ホームは「とてもそう思う」が 100%という結果になった（図 7）。

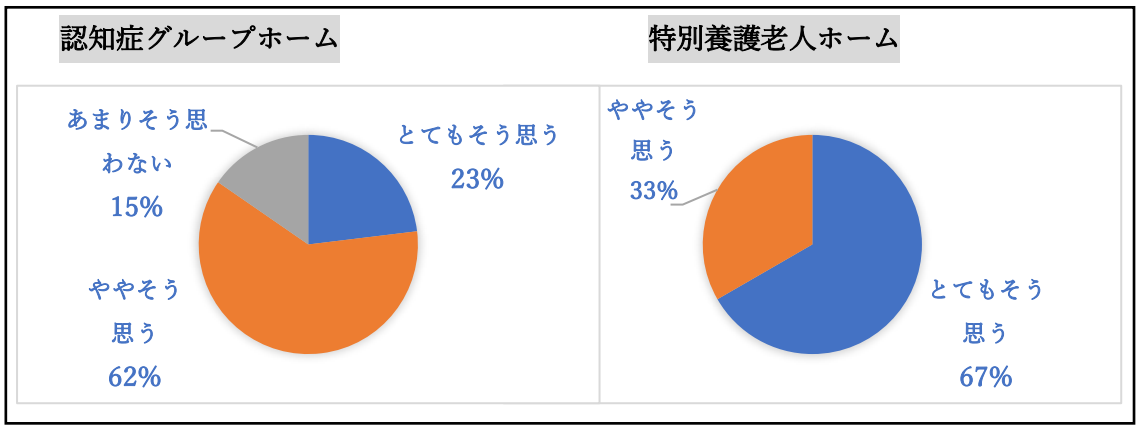
図 7　利用者は CAPP 活動を楽しんでいらっしゃると思いますか？



（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」より筆者作成

職員へのリラックス効果では、認知症グループホームでは「とてもそう思う」が 23%、「ややそう思う」が 62%、「あまりそう思わない」が 15%という結果だった。一方で、特別養護老人ホームの職員は「とてもそう思う」が 67%、「ややそう思う」が 33%という結果だった（図 8）。

図 8　CAPP 活動は職員のリラックス効果や気分の向上につながっていると思いますか？

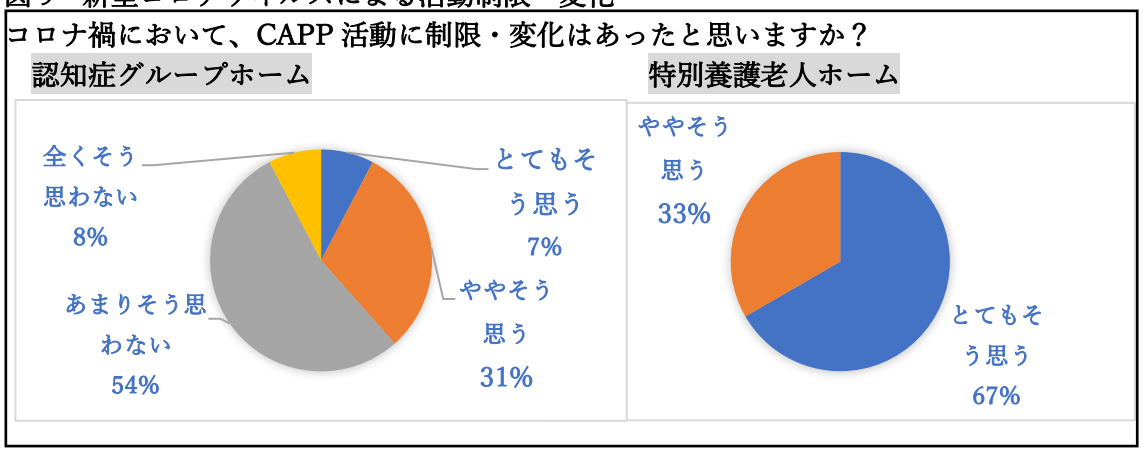


（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」より筆者作成

新型コロナウイルスによる影響については、CAPP 活動の制限・変化について、特別養護老人ホームは制限・変化があったことが伺える。認知症グループホームでは、あまり制限・

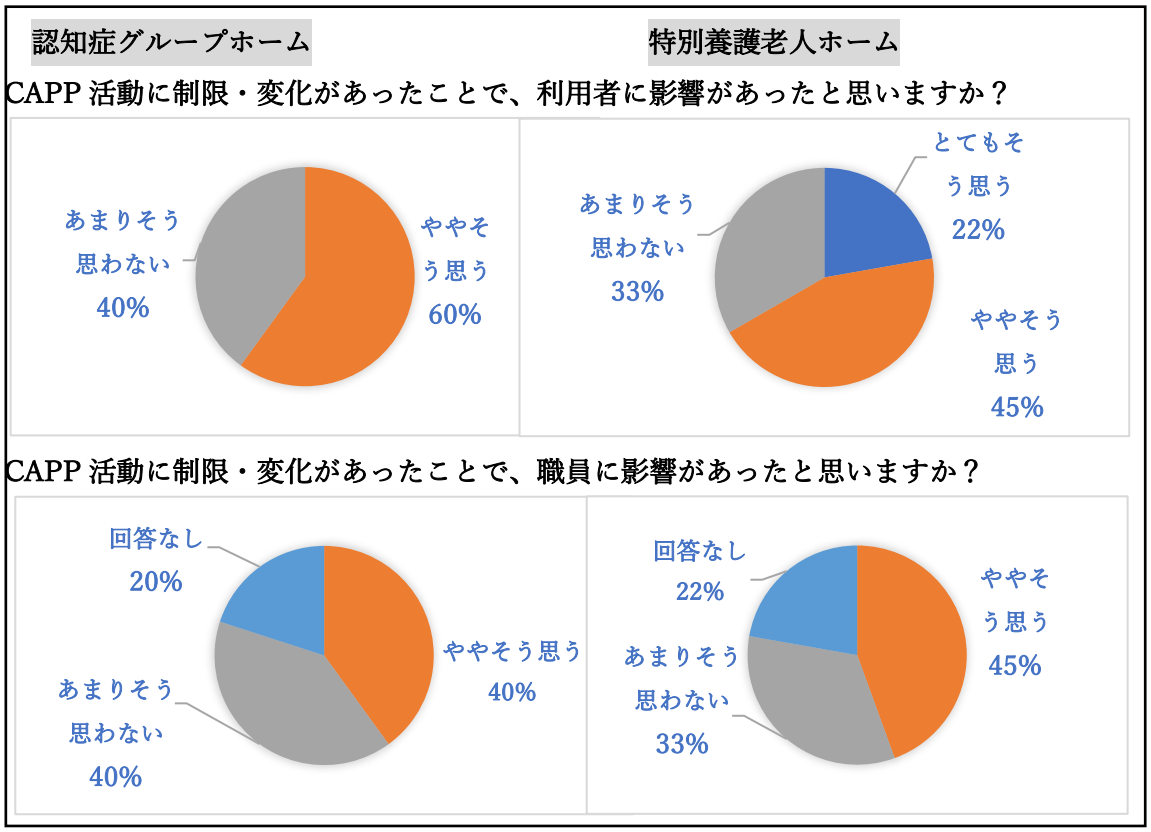
変化がなかったと感じる職員の割合が多い結果となった（図 9）。CAPP 活動の制限・変化による利用者への影響については、認知症グループホームと比べて特別養護老人ホームの方がやや影響が強いことがわかった（図 10）。職員への影響については、施設の違いによる差異があまりないことが認められる（図 10）。

図 9　新型コロナウイルスによる活動制限・変化



（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」より筆者作成

図 10　活動の制限・変化による利用者・職員への影響



（出典）筆者「アニマルセラピー(CAPP 活動)に関するアンケート調査」より筆者作成

第 3 節　考察

1. アンケート結果による高齢者への影響と施設職員への影響

回答者の役職・現在の職場に勤めている年数・CAPP 活動に携わっている年数による顕著な回答の差異は認められなかった。各施設の回答結果では回答の選択が類似する傾向が見られた。このことから、各施設による動物とのふれあい方に違いがあることで、利用者への影響が異なり、施設職員が受ける利用者の印象やエピソードにも違いが見られると考察する。また、回答者と利用者の関わり方の違い、利用者の要介護度・動物に対する関心の違いなど、様々な事柄に起因したアンケート結果であったことが推察される。

利用者への影響に関する質問において、CAPP 活動が利用者の生活の刺激・楽しい時間になっている傾向が強いと言える。利用者の落ち着いた状態・自発的な活動・身体活動の維持を質問した回答では、すべて「ややそう思う」が最も多い回答であった。CAPP 活動によって効果のある利用者がいる一方で効果のない利用者もいることが推察される。また、CAPP 活動が直接的な要因であるか推し量ることが難しい点や、大きな変化・効果が見受けられたわけではないといった理由から、「ややそう思う」という回答が多かった可能性がある。しかし、「全くそう思わない」の回答がなかったこと・肯定的な回答が優位であったことから、CAPP 活動による利用者の精神的・身体的な影響に良い効果を及ぼしていると考えられる。

今回のアンケートでは、質問項目や回答の結果から精神的影響が大きいと考えられる。自発的な活動・身体活動の維持につながったかの質問における「あまりそう思わない」の回答数は、どちらも 32 名中 8 名であった。対して「落ち着いた状態」では 3 名の回答であった。また、「ややそう思う」の回答数が 25 名であり、自発的な活動・身体活動の維持と比べても多かった。このことから、必ず効果があるわけではないものの、CAPP 活動によって落ち着いた状態が確認されていることが推察され、精神的な影響に高い頻度で関与していると言える。

アンケート作成の際の参考文献である水谷ら（2008）の調査では、落ち着いた状態に関する質問において落ち着いた状態が増加したという回答は 36%、変化がないといった回答が 64%という結果であった。この違いは、施設飼育型・施設訪問型という実施形態の異なる施設に対してアンケートが行われていることが考えられる。水谷歩らの調査では、JAHA が実施している施設訪問型である CAPP 活動を、定期的に行う高齢者入居施設の職員が対象となっている。一方で、筆者が行ったアンケートの対象は施設飼育型の施設職員である（施設訪問型の CAPP 活動も併せて実施している施設を含む）。アンケート調査の規模などによる

違いも考慮しなければならないが、この対象としている活動の形態が異なることによる回答の違いと仮定した場合、施設飼育型の方が施設訪問型の活動に比べて精神的影響がある可能性が推察される。施設訪問型の活動はレクリエーションの機能が強く、落ち着いた状態よりも楽しむという感情の生成につながっていることが考えられるため、本アンケートと違いがあったことが考えられる。

施設職員に対する質問項目では、動物が苦手であるために「あまり楽しくない」と回答している回答者がいるものの、職員へのリラックス効果においては肯定的な回答が得られている。職員へのリラックス効果等について、現場の施設職員の全体の雰囲気から効果が感じ取れることが伺え、CAPP 活動による生理的効果が施設職員にあることが考えられる。職員間のコミュニケーションにおいても良い影響を及ぼしている傾向がある。しかし、時に職員間の意見の相違等につながることもあるため、必ず良い影響を及ぼすとは言い難い結果となった。

CAPP 活動の導入については、否定的な回答がなかったことから、利用者・職員・環境などにプラスの働きをしていることが推察され、動物の存在による効果が表れている。アンケートでは、動物が苦手な人や職員の業務負担、夜間の動物の鳴き声による利用者への影響等の回答も見受けられた。しかし、CAPP 活動の導入について肯定的であることから、プラスの面が大きいことがわかる。

2. 認知症グループホームと特別養護老人ホームの比較

認知症グループホームと特別養護老人ホームの比較から、施設の形態、利用者の状況・状態、それによる施設職員が受ける印象によって違いが表れたことが考えられる。

利用者間の話題に差がでた理由として、要介護度や施設の形態が関係していると推察する。特別養護老人ホームの入居対象者は原則要介護度 3 以上の高齢者となっており、要介護度が高いために利用者同士の交流が少なく、人数も多いことからも個々の交流があまりないのではないかと考える。認知症グループホームは少人数での生活であり、特別養護老人ホームに比べて自立度が高いため利用者間での交流があることが考えられる。

活動を楽しんでいるかという質問では、特別養護老人ホームの施設職員の全員が「とてもそう思う」を選んでいた。理由として施設飼育型だけでなく施設訪問型の CAPP 活動も行っていること、外出の機会が少ないからこそ動物とふれあう時間が笑顔や刺激につながり、施設職員に伝わっていることが考えられる。また、認知症グループホームに比べて利用者の

人数が多いことから、全体的な様子として楽しんでいる利用者が多いことで回答した可能性も挙げられる。認知症グループホームは少人数であるため、それぞれの利用者の様子から楽しんでいるかどうかを捉え回答した結果であると考えられる。また、CAPP 活動以外の活動やレクリエーションと比較した可能性もある。さらに、少人数であることによってふれあえる機会が多く、距離が近いことで「楽しむ」という感覚ではないことも考えられる。

施設職員のリラックス効果や気分の向上についての比較による回答の差は、職員体制やそれによる業務量などが考えられる。動物に対する関心の差が表れた可能性も推察されるが、施設の形態による違いが大きいと考える。

新型コロナウイルスによる影響については、感染対策等によりふれあいの形が変化したことが考えられるが、利用者への影響で特別養護老人ホームの方が利用者に影響があったことについては、施設訪問型の CAPP 活動が中止となっていることが関係していると言える。B 法人の職員によると、アンケートに協力してくれた施設において施設訪問型の CAPP 活動を行っていることがわかったため、その違いによる回答の差であったと推察できる。

第 4 節　本調査の限界と課題

本調査は回答者が 32 名と限られていたこと、また調査対象が一つの法人に留まっていたことから、高齢者介護施設の高齢者への影響と施設職員への影響について代表性が低い結果となった。また、アンケート項目が限られていたこと、質問の意図を回答者によって捉え方が異なる可能性があったことも課題として残された。

施設職員の立場からみた利用者の様子などの回答においては、良い影響の傾向があることが認められたものの、利用者に対するアンケート調査は行っていないため本人の思い・感情などを充分に把握することができなかったことは、本調査の限界である。

今後、施設飼育型のアニマル・セラピーを行っている広範な高齢者介護施設への調査が必要であるといえる。その際には、アンケート調査だけでなく、利用者と関係性を構築しつつ参与観察など、利用者の声を反映できる調査が実施できるように工夫することが求められる。

終章

本論文では、アニマル・セラピーが高齢者に及ぼす影響について注目し、とくに施設で暮らす高齢者の身体的・精神的影響及び施設職員への影響について調べるだけでなく、アニマル・セラピーの効果と今後の在り方について検討することを目的とした。その結果、各章では以下のことが把握できた。

第 1 章では、アニマル・セラピーとはなにかアニマル・セラピーの目的や歴史について述べた。アニマル・セラピーが進んでいる欧米などと比べ、日本はボランティアによる活動が多いことがわかった。

第 2 章では、アニマル・セラピーについて詳しく述べた。アニマル・セラピーは目的によって活動が分類されるが、高齢者施設では殆どが AAA というレクリエーション・動物とふれあうことが目的の活動が行われている。アニマル・セラピーによる効果は、生理的・心理的・社会的利点があり、高齢者には身体・心理・社会性効果が期待されている。諸外国での高齢者に対するアニマル・セラピーの研究論文や報告は数多く存在するのに対し、日本の研究論文は多くは見受けられなかった（Google Scholar、CiNii での検索結果より 2022.12.20 閲覧）。

第 3 章では、アニマル・セラピーが高齢者や施設職員に及ぼす影響について述べた。さらに、ペット・ロスについても触れた。高齢者に対する影響として、身体・心理・社会性の効果がある傾向が高いことがわかったが、動物に対する関心の度合いによって効果が異なることが言える。職員への影響については先行研究が少なかった。高齢者・施設職員への影響は、動物への関心度が大きく関係していると考えられる。また、施設訪問型のアニマル・セラピーの実施では、施設職員は高齢者のサポートを行っているため、業務中の施設職員への効果はあまり認められない場合がある。ペット・ロスは、施設飼育型の場合に愛着や精神的結びつきが強いことで深い悲哀の状態に陥る可能性が推察されるため、ケアの方法や予防策を把握し、実践することが必要である。

第 4 章では、動物のストレスとロボット・セラピーについて述べた。Google Scholar での検索結果では、日本で行われているアニマル・セラピー時の動物のストレス測定は、対象が犬の文献のみであった。環境による軽度のストレスが認められるが、大きなストレスは感じていないことがわかった。活動時間や環境などが適切に整えられていれば、犬の場合はストレスが少ないが、他のコンパニオン・アニマルの場合の負担の有無について研究が必要であると考える。ロボット・セラピーはアニマル・セラピーの代替として機能することがわかっ

た。環境によってアニマル・セラピーが難しい場合、動物の死に対するつらさなどの面をロボット・セラピーはクリアしている。しかし、アニマル・セラピーと同様に関心がない人へは効果がない方法であることに留意する必要がある。

第 5 章では、アニマル・セラピーによる高齢者と施設職員への影響についての調査結果を述べた。アニマル・セラピーによる高齢者の身体・精神に良い効果があることが認められた。回答についてもプラスな回答が多かった。しかし、動物が苦手な人や業務の負担などに触れている人もいたことから、体制を整えた上で施設飼育を始める必要性や理解を得ることなど、施設飼育を始めるハードルは高いことが推察される。また、動物の死による落ち込みも回答としてあったことから、ペット・ロスの認識や援助方法等も加味して実施する必要がある。

今後、アニマル・セラピーがさらに普及するためには、科学的な研究を推し進め、発信することが重要である。また、安全にアニマル・セラピーを実施する上でアニマル・セラピーのコーディネーターが福祉現場で活躍できる幅を広げることも必要であると考える。そして、アニマル・セラピーについて調べるなかで、様々なセラピー方法があることがわかった。論文を執筆する前までは、アニマル・セラピーが人に良い影響を及ぼすからこそ、広めていくべきだと感じていたが、アニマル・セラピーの利点・欠点、その他のセラピーを知っていくなかで、人それぞれに合う方法が行われるように工夫していくことが大切であると感じた。

謝辞

本調査にご協力いただきました B 法人の職員の皆様、関係者の皆様、連絡・調整などアンケート調査を行う上で窓口となってくださった担当者様に心より感謝いたします。改めて、誠にありがとうございました。

引用文献

アイペット損害保険株式会社，2016,「ペットと別れた飼い主の 6 割が何らかの不調を感じた経験を持つ～ペットとのお別れに関する調査～」（https://www.ipet-ins.com/info/7249/）2022.12.27 閲覧.

安藤孝敏，2008,「ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響」『横浜国立大学教育人間科学部紀要. III，社会科学』10，pp.1-10.

「Bethel」（https://www.bethel.eu/home.html）2022.12.17 閲覧.

堀井隆行，植竹勝治，金田京子他，2003,「動物介在活動中のイヌの行動と尿中カテコールアミン濃度によるストレス評価」『日本畜産学会報』74(3)，pp.375-381.

GROOVE X 株式会社，「LOVOT、一緒にいると笑顔になる-そばにいると笑顔になるLOVOT」（https://lovot.life/lp/petrobot_lovot?utm_source=yahoo_KW&utm_medium=paid&utm_content&utm_campaign=AD_2205）2023.01.05 閲覧.

星旦二，櫻井尚子，谷口優他，2018,「犬猫を飼育する高齢者における 13 年後の要介護度予防効果」『日本社会医学会機関誌』35(2)，pp.31-42.

星旦二，谷口優，山本和弘他編，2020,『ペットがもたらす健康効果“国内外の科学論文のレヴューから考える”』社会保険出版社.

IAHAIO，2014（2018 改訂版），「IAHAIO WHITE PAPER- THE IAHAIO DEFINITIONS FOR ANIMAL ASSISTED INTERVENTION AND GUIDELINES FOR WELLNESS OF ANIMALS INVOLVED IN AAI-」（https://iahaio.org/wp/wp-content/uploads/2021/07/julye21-iahaio-whitepaper-2018-japanese.pdf）2022.12.16 閲覧.

一般社団法人国際家庭犬トレーニング協会，2017,「アニマルセラピーの活動の形態」（アニマルセラピー活動の形態（dogtraining.or.jp））2022.12.19 閲覧.

一般社団法人ペットフード協会，2022,「令和 3 年 全国犬猫飼育実態調査」（https://petfood.or.jp/data/chart2021/index.html）2023.01.06 閲覧.

岩本隆茂・福井至，2001,『アニマル・セラピーの理論と実際』培風館.

内田佳子，2001,「高齢者施設の居住者と動物介在活動」岩本隆茂・福井至,『アニマル・セラピーの理論と実際』培風館.

内田佳子，2001,「動物の飼育と『ペット・ロス（喪失）症候群』」岩本隆茂・福井至,『ア

ニマル・セラピーの理論と実際』培風館.
株式会社知能システム，2018,「アザラシ型ロボット・『パロ』によるバイオフィードバック・セラピーをアメリカ合衆国の高齢者向け公的医療保険『メディケア』が安全で、新たな『非薬物療法』として保険適用」（http://intelligent-system.jp/ples2018_10_15.pdf）2023.01.05 閲覧.
金児恵，2006,「コンパニオン・アニマルが飼主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響」『心理学研究』77(1)，pp.1-9.
川添敏弘，2009,『アニマル・セラピー』駿河台出版社.
片寄亮，2015,「一地域在住高齢者における身体的・精神的・社会的健康の維持とペット飼育との関連の検討－K町悉皆調査－」滋賀医科大学.
木村龍平，2012,「ペット型ロボットを用いた認知症高齢者を対象としたロボット・セラピー」『計測と制御』51(7)，pp.633-639.
木村祐哉，2009,「ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方」『心身医学』49(5)，pp.357-362.
公益社団法人日本動物病院協会,「アニマルセラピー　人と動物のふれあい活動（CAPP)」（https://www.jaha.or.jp/hab/capp/）2022.12.01 閲覧.
三島富有，池田晋平，芳賀博，2019,「ペット飼育の有無と高齢者の身体的・心理的・社会的健康の関連」『老年学雑誌』(9)，pp.33-47.
水谷歩，柴内裕子，内山晶，2008,「高齢者福祉施設等で実施される『アニマルセラピーについての効果』の検証事業」『日本獣医師会雑誌』61(1)，pp.5-12.
Morrison,M.L.，2007，“Health Benefits of Animal-Assisted Interventions” Journal of Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine 12 (1) pp.51-62.
「日本治療的乗馬協会」（https://jtranet.jp/）2022.12.01 閲覧.
大森理絵，長谷川寿一，2009,「人と生きるイヌ-イヌの起源から現代人に与える恩恵まで」『動物心理学研究』59(1)，pp.3-14.
Pet Lovers Meeting,「PLM について」（https://www.ddtune.com/plm/aboutus）2023.01.05 閲覧.
ペットロス支え愛の会「わたしたちのこと」（https://sasaeainokai.jimdofree.com/）2023.01.05 閲覧.
Pet Partners,「The Pet Partners Story」

(https://petpartners.org/about-us/petpartners-story/)2022.12.18 閲覧.
レビンソン,B.M.，2002,『子どものためのアニマルセラピー』(川原隆造・松田和義・東豊他訳)，日本評論社，pp i -vii.
坂元薫，2005,「『別離』への心の予行演習-ペットロス症候群-」(https://www.med.or.jp/dl-med/people/plaza/201.pdf) 2022.12.30 閲覧.
産業技術総合研究所，2004,「世界一の癒し効果、アザラシ型ロボット『パロ』、いよいよ実用化」(https://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2004/pr20040917_2/pr20040917_2.html) 2023.01.05 閲覧.
産業技術総合研究所，「パロの目的とセラピー効果」(http://paro.jp/?page_id=244) 2023.01.05 閲覧.
ソニーマーケティング株式会社，「aibo」(https://aibo.sony.jp/) 2023.01.05 閲覧.
田中智夫，太田光明，植竹勝治，2004,「動物介在活動における活動形態の違いと慣れがイヌのストレス強度に及ぼす影響」『麻布大学雑誌』9/10，pp.113-117.
田中智夫，太田光明，植竹勝治他，2006,「動物介在活動における活動形態の違いと慣れがイヌのストレス強度に及ぼす影響　第 2 報」『麻布大学雑誌』11/12，pp.126-129.
徳本大官，村上陽子，森田茂他，2001,「高齢者施設における小型犬の AAA (動物介在活動) 展示方法」『酪農学園大学紀要.自然科学編』26(1)，pp.23-30.
特定非営利活動法人日本治療的乗馬協会，2021,「活動の紹介」(https://jtranet.jp/casestudy/) 2022.12.19 閲覧.
戸山文洋，小川家資，2009,“高齢者施設における動物介在活動と音楽療法の効果比較-身体活動量と自律神経系活動の評価から-”，日本人間工学会第 50 回記念大会，日本人間工学会.
上田智子，青木健，2018「認知症高齢者に対するアニマルセラピーの効果」『環境経営研究所年報』17，pp.53-57.
植竹勝治，大塚野奈，長田佐知子他，2007,「特別養護老人ホームでの動物介在活動に繰り返し参加した飼い犬のストレス反応」『日本家畜管理学会誌・応用動物行動学会誌』43(4)，pp.192-198.
山岡久俊，今井岳，渡辺一郎他，“認知症高齢者を対象とした親和的ロボットによるロボット・セラピー”，2010 年度人工知能学会全国大会（第 24 回)，長崎県長崎市，社団法人人

工知能学会，一般社団法人人工知能学会.
山川伊津子, 2020,「動物医療ソーシャルワークと動物看護師」『Veterinary Nursing』25(2), pp.9-14.
山﨑恵子, 2014,『アニマルセラピー実践-その構築に関わるコーディネーターの役割-』, (株)ウイネット出版.
山田弘司，2001「アニマル・セラピーの歴史」岩本隆茂・福井至，『アニマル・セラピーの理論と実際』培風館.
横山章光，1996,『アニマル・セラピーとは何か』日本放送出版協会.
米岡利彦，2012,「高齢者施設でのロボット・セラピー」『計測と制御』51(7)，pp.609-613.

参考文献

福井弘教，2021,「コンパニオン・アニマル（CA）の現状と課題：神奈川県、横浜市の動向を手がかりに」『地域イノベーション』13，pp.13-26.
浜田利満，横山章光，柴田崇徳，2003,「ロボット・セラピーの展開」『計測と制御』42(9), pp.756-762.
林潔，高橋良博，高橋浩子，2018,「高齢者支援と動物や植物とのかかわり」『社会と人文= Studies in humanities and society /社会人文研究会編』(15)，pp.61-68.
桃井真帆，2001,「高齢者に対するアニマルセラピーの意義」『研究紀要 / 福島学院短期大学編』33，pp.39-44.
成田琢郎，木山真大，川上智子他，2003,「動物介在ケア活動の必要性に関する調査研究-これからの動物介在活動や動物介在療法活動の意義-」『山口獣医学雑誌』12(30)，pp.75-85.
曽野亜早，2003,「高齢者介護とアニマルセラピー（1)」『月刊ゆたかなくらし:わが国唯一の高齢期福祉・介護総合誌/全国老人福祉問題研究会編』(256)，pp.67-69.
曽野亜早，2003,「高齢者介護とアニマルセラピー（2)」『月刊ゆたかなくらし:わが国唯一の高齢期福祉・介護総合誌/全国老人福祉問題研究会編』(257)，pp.62-65.
曽野亜早，2003,「高齢者介護とアニマルセラピー（3)」『月刊ゆたかなくらし:わが国唯一の高齢期福祉・介護総合誌/全国老人福祉問題研究会編』(258)，pp.63-66.
曽野亜早，2003,「高齢者介護とアニマルセラピー（最終回)」『月刊ゆたかなくらし:わが国

唯一の高齢期福祉・介護総合誌/全国老人福祉問題研究会編』(259)，pp.64-67.
Robinson, I，1997,『人と動物の関係学』（山崎恵子訳）インターズー.
柴田崇徳，2017,「メンタルコミットロボット『パロ』の開発と普及-認知症等の非薬物療法のイノベーション-」『情報管理』60(4)，pp.217-228.
寺尾恭徳, 木村公喜,「ペット愛好家における、ペットと飼い主との 健康に関する相互関係」『日本経大論集』41(1)，pp.145-155.
矢野勝治・吉岡英里・増山貴子他，2009,「森田療法センターにおける動物飼育の治療的意味」『東京慈恵会医科大学雑誌』124(5)，p.218.

別紙・アンケート調査用紙

「アニマルセラピー（CAPP 活動）」に関するアンケート調査

本調査は、卒業論文執筆（明治学院大学社会学部社会福祉学科 4 年神野みこと）に向けて、「アニマルセラピーがご利用者様及び職員の皆様に与える精神的・身体的影響やその実態」について把握することを目的とするものです。お忙しいところ大変恐縮ですが、下記のアンケートにご協力をお願いします。

● 基本属性

A）勤めている施設の種別を教えてください。

①特別養護老人ホーム ・ ②認知症グループホーム ・ ③その他（　　）

B）現在の職場に勤め始めたのは、いつからですか？　（西暦　　年より）

C）現在の職場でアニマルセラピー（CAPP 活動）に関わって何年になりますか？

（　　年）

D）現在、所持している資格などがあれば教えてください。

（　　）

E）現在の職場での役割（役職）について教えてください。

（　　）

● 施設職員の皆さんから見た CAPP 活動による利用者の様子について教えてください。

1．CAPP 活動があることを理由に、この施設を選んだ利用者は多いと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

2．利用者はCAPP活動を楽しみにしていらっしゃると思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

3．利用者間でCAPP活動について話題にしていることがありますか？

①ほとんど毎日　・　②週4~5日　・　③週2~3日　・　④ほとんどしない

4．利用者はCAPP活動を楽しんでいらっしゃると思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

5．CAPP 活動に参加することで、利用者の日常生活において落ち着いた状態が増えたと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

6．CAPP 活動に参加することで、利用者による自発的な活動の機会が多くなったと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

7．CAPP活動に参加することで、利用者の身体活動の維持につながったと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

● 施設職員の皆さんから見たCAPP活動とその影響について教えてください。

1．CAPP活動が導入されていてよかったと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

2．介護福祉現場でCAPP活動に携わることについてどう思いますか？

①とても楽しい　・　②やや楽しい・　③あまり楽しくない・　④全く楽しくない

2－1．そのように思う理由を教えてください。

（理由：　　）

3．CAPP活動によって職員間のコミュニケーションは、より良いものとなっていると思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

3－1．そのように思う理由を教えてください。

（理由：　　）

4．CAPP活動は職員のリラックス効果や気分の向上に繋がっていると思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

4－1．そのように思う理由を教えてください。

（理由：　　）

● **コロナ禍の CAPP 活動について教えてください。**

１．コロナ禍において、CAPP 活動に制限・変化はあったと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

↓ ①・②に回答した方にお聞きします。

１－１．CAPP 活動に制限・変化があったことで、利用者に影響があったと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

１－２．CAPP 活動に制限・変化があったことで、職員に影響があったと思いますか？

①とてもそう思う・②ややそう思う・③あまりそう思わない・④全くそう思わない

◆ ご記入ありがとうございました。今回の調査によって得られた情報は、明治学院大学社会学部社会福祉学科の卒業論文執筆の目的以外に利用することはなく、また個人が特定されないように努めます。　（調査担当者：明治学院大学　４年生　神野 みこと）

◆ なお、本調査項目は、一部 水谷歩ら（2008）「高齢者福祉施設等で実施される【アニマルセラピーについての効果】の検証事業」を参考に、作成したものである。